

「地域診断ワークショップ」実施報告

公益社団法人地域医療振興協会 ヘルスプロモーション研究センター

野藤 悠 吉葉かおり 阪本康子
嶋田雅子 中村正和

はじめに

2016年1月23日、24日の2日間、地域医療振興協会西日本事務局にて、「地域医療のススメ」修了生の集い・ポートフォリオ相談会(以下、集い)が開催された。「地域医療のススメ」とは、地域医療・家庭医療専門医を養成する目的で地域医療振興協会が運営する後期研修プログラムである。ヘルスプロモーション研究センター(以下、ヘルプロ)は、地域ぐるみの予防活動を推進する上で基本となる地域診断を重視して活動しており¹⁾、この集いにおいては、地域医療を担う医師向けに地域診断をテーマにワークショップを開催した。本稿では、その内容と会期中の様子を報告する。

地域診断ワークショップ

1. 開催日時

集い初日の2016年1月23日(土)に、地域診断をテーマに、健康づくり・予防の観点から、具体的な地域を設定して地域診断の一連の過程を体験する2時間半のワークショップを開催した。

2. ワークショップの目的

ワークショップの目的は、地域医療の担い手である臨床医および後期研修医に、地域の健康課題を把握することの重要性を再認識し、地域



写真1

診断実践へのモチベーションを高めてもらうこと、地域診断を行う際に必要となる基礎的なデータへのアクセス方法に関する情報提供を行うことであった。

3. 参加者

ワークショップには、「地域医療のススメ」修了生14名、後期研修医12名、指導医3名が参加した。

4. プログラム

ワークショップのプログラムを表1に示す。

まず、「地域全体の健康課題を知りたくなったとき、あなたならどうする?」をテーマに、群馬県嬬恋村診療所に赴任したという場面設定のもと、地域の健康課題を知るためにどのような情報を得るかについて、グループごとに議論した(写真1)。各グループからは、主要な死因の死亡率を調べるといった意見や、特定健診のデータから生活習慣を把握するといった意見のほか、飲食店の分煙実施率を調べるといった意見なども挙げられた。その後、簡単に情報を得

表1 「地域診断ワークショップ」プログラム(150分)

1. 「実践！地域診断～赴任先で地域の課題をみつけよう～」

課題1 「婦恋村診療所に赴任後、地域の健康状態を調べてみたくなりました。さて、あなたならどうしますか？」(40分)

グループワーク・発表

解説 (ヘルスプロモーション研究センター 研究員 野藤 悠)

課題2 「この村にはどのような健康課題がありますか？」

また、その課題解決のためにどのような対策が必要とされますか？」(60分)

グループワーク・発表

解説 (ヘルスプロモーション研究センター センター長 中村正和)

質疑応答 (10分)

2. 事例紹介「豊岡市地域診断プロジェクト活動報告」 (30分)

質疑応答 (10分)

図1 地域診断に必要な項目の例

既存データに基づく分析

政府統計(e-stat), 各省庁・市町村のHP
国保データベース (KDB)の活用

基本情報

人口・世帯 (人口総数、高齢化率)
行政基盤 (財政力指数)
労働 (産業別人口割合)
医療 (病院数、国保加入率) など

医療データ

平均寿命
標準化死亡比
医療費
がん検診受診率
特定健診・特定保健指導関連指標など

介護データ

健康寿命
要介護認定率など

生活習慣

運動習慣、食物摂取状況、
飲酒・喫煙など

追加調査(定量・定性)

住民や関係者へのヒアリング
質問紙調査・測定

地域環境・地域資源

医療、保健施設
健康づくりの団体などの人的資源
ソーシャルキャピタル
町並み、歩道、交通状況
集える場所
公園、運動施設
食料品店など

住民の考えやニーズ

健康づくりに対する価値観
健康づくりに関するニーズなど

詳細な生活習慣

身体活動量
塩分摂取量など

自治体・医療機関
地域住民

計画の立案

優先順位の決定
目標値の設定

Plan

実行

Do

評価

Check

改善

Act

地域の健康課題・実態の“見える化”

る方法の一つとして、政府が公表している既存統計資料をワンストップで提供している「政府統計の総合窓口(e-Stat)」<http://www.e-stat.go.jp>や、ヘルプロが運営している「公衆衛生ねっと」<http://www.koshu-eisei.net/>を紹介するなど、既存統計資料の活用について解説した。また、地域の実態をより詳細に把握し、対策の立案につなげるには、定性および定量的な追加調査を行う必要があることを解説した(図1)。

次に、婦恋村の既存統計資料(将来の人口推計、主要死因の標準化死亡比、医療費、特定健診・がん検診データ、要介護認定率など)を実際に見ながら、地域にどのような健康課題があり、その課題解決のためにどのような対策が必要か、グループごとに議論した。抽出された健康課題に対する対策として、各グループからは、温泉を活用した運動の場をつくるといった案や、実態を分かりやすく広報するといった案が

発表された。その後、データの見方や解釈の仕方を解説し、対策案についてヘルプロの見解を述べた。

最後に、実際に地域に入り学生主体で地域診断を実践している、自治医科大学医学部4年生の守本陽一氏に「豊岡市地域診断プロジェクト活動報告」と題して、兵庫県豊岡市での実践事例を紹介していただいた。守本氏からは、「統計データを分析するだけでなく、実際に街を歩いて勤務医や開業医、救急救命士、介護関係者、行政、教育者、民生委員、NPO団体など関係者の生の声を聞き、現場における疑問を抽象・概念化して健康課題をまとめた」ことが報告された。さらに、「診断のみでは地域にとってのメリットは少ないと考え、2015年12月に学生と住民、医療関係者が集まり健康課題の解決策を考える地域診断報告会を行ったところ、子どもカフェのような取り組みにつながりつつある」ことも報告された。守本氏の活動の詳細については、日経メディカルに掲載された記事や報告書^{2), 3)}を参照されたい。

5. アンケート結果

ワークショップ終了後にアンケートを実施し、「地域医療のススメ」修了生14名の回答を得た(回収率100%)。有用性および理解度に対してそれぞれ「とても良かった」「良かった」「普通」「悪かった」「とても悪かった」の5段階評価を行ったところ、いずれも約6割の参加者が「とても良かった」または「良かった」と回答し、約4割が「普通」と回答した。また、自由記述を求めたところ、「地域診断の実施方法や事例が印象に残った」「学生の取り組みで刺激を受けた」などのコメントが寄せられた。

おわりに

今回のワークショップでは、地域診断への第一歩を後押しすることを目的に、既存データへのアクセス方法などを解説し、グループワークを通して、データを見て対策を練るまでの一連の過程を簡単に体験していただいた。さらに、地域診断が地域での活動おこしにつながるという、まさに好事例の報告を学生が行った。

ワークショップ中の質疑応答では、自治体が保有するデータへのアクセス方法に関する質問や既存データを分かりやすく示す方法に関する質問が多数あがった。さらに、「学生の活動に感動した」「自分が赴任している地域の地域診断を行いたい」という声も聞かれ、地域診断に対する関心の高さ、実践への意欲が伺われた。一方で、アンケートでは有用性や理解度について約4割の参加者が「普通」と回答しており、今回は1回限りの短時間でのワークショップであったため、十分に満足 of いくものではなかったと考えられる。今後、臨床医や後期研修医のニーズに合った、より満足度の高いプログラムの検討が必要であると感じている。

地域診断を行政だけが行うのではなく、医療職も関心を持ち地域の健康課題を共有できるとより対策が進むことが期待される。今後も、医学生や医師らとの交流を深め、医療と保健をつなぐ活動を推進していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 嶋田雅子, 吉葉かおり, 野藤 悠, 他:ヘルスプロモーション研究センターの活動紹介-「今こそ地域診断」セミナー報告とともに-. 月刊地域医学 2015;29(7):538-541.
- 2) 守本陽一:医療系学生が実際に歩いて学んだ「豊岡市地域診断プロジェクト」重要な「地域との関わり」, 誰が教えてくれるの? <http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/all/cadetto/igakusei/report/201602/545599.html> (accessed 2016 Mar 4)
- 3) 守本陽一:豊岡市地域診断プロジェクト報告書Ver.20